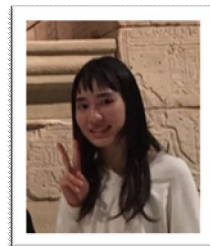


第24回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ②

「私を動かす、熱」

佐々木 美緒

高崎女子高等学校 2年



キャンプは5日間という短い期間にも関わらず、私の人生に突き刺すように鋭く、それでいて未来を自ら照らすような強さを持った光を与えてくれた。このキャンプで感じた参加者1人1人が持つ「情熱」を、掴み取る事ができた「情熱」を、私は絶対に忘れたくない。そして、このキャンプを楽しかった思い出というありきたりな言葉で片付けたくはない。それほどまでにこのキャンプは毎日が刺激に満ち、充実したものだ。そこで、このキャンプを2つの点から振り返りたいと思う。

1つ目は、「人と向き合う姿勢」を学んだという点である。韓国人学生のほとんどは日本語を話すことができたため、言葉が通じないという心配は要らなかった。(今改めて考えてみても本当にすごいことだと思う)しかし私は韓国語を話せないため、韓国語で会話が始めると全く会話に入れず、ただ眺めているだけという場面が多くあった。

1日目は、このままだと仲良くなれない、最後の日に後悔が残ってしまうという不安でいっぱいだった。だが私の不安は次の日、解消された。日本語が話せない韓国人学生から「これ、日本語でなんて言うの?」と英語で話しかけられたのだ。私は日本を知ろうとしてくれていることが嬉しかった。それと同時に、コミュニケーションに必要なのは相手と仲良くしようとする姿勢なのだと気づかされた。韓国語が話せないから、私が韓国人に寄り添えないということはない。仲が縮まらないと諦めてはいけない。自ら韓国を知ろうと積極的に動けばいいのだ、と。その日から急速に班員との仲が縮まり、たくさんの楽しい時間を共有することができた。

2つ目は、「自分の強みを持つ」という点である。私達8チーム MUTEKI は「Light Switch」という民泊サービスを計画した。事業アイテムを決める時にも、サービス内容を決める時にも、発表の仕方を決める時にも、チーム全員で詳細まで話し合い、ア

アイデアをぶつける。そして、準備にはそれぞれの得意な分野で作業を進める。そういった事業アイテムの作成過程は私にとってどれも初めてのことであり、全てが新鮮で、充実したものだ。

この過程で最も驚かされたのは、チームメンバーが持つスキルである。計画案作成が得意な人、チームをまとめて動かすことができる人、周りを見て進行する人、斬新なアイデアを出してくれる人、動画製作ができる人……など、メンバー1人1人が個性、強みを持っていた。自分では考え付かないようなアイデアや、高校生とは思えない実行力に触れられることができたのは本当に幸せなことだと思う。私も自分ならではの強みを身につけなくてはいけないと痛感した。

また、メンバー全員の尽力のおかげで私達のチームはグランプリを取ることができた。グランプリという形で私達の事業アイテムが認められて嬉しかった。何よりもチームで「Light Switch」サービスの発表という1つの目標に向かって頑張ったことが

本当に楽しかった。

キャンプが終わって、何日も過ぎた。時間が過ぎ、私の宝物が詰まった5日間が遠ざかってしまうのが寂しい。ただ、この思い出が、私がこのプログラムを通して受け取った光が、色褪せることの無いように、キャンプで学んだ「積極性」「計画力」「会話力」そして、自ら世界を拓いていく「情熱」……など様々なことを常に心に留めていたいと思う。今、私を動かす熱、つまりエネルギーはこのキャンプでの貴重な経験である。キャンプに参加することができて本当に良かったと思う。

こんなにも充実した5日間を過ごせたのは、たくさんの人の支えがあったからだと思っています。日韓高校生交流キャンプ事業に関わってくださった方々、そして8チーム MUTEKI のメンバーのみんな、キャンプ中に仲良くしてくれたみんな、本当にありがとうございました。また会いたいです！！最高に楽しく、最高にアツいキャンプでした！

「Pentagon Hotel」

金 亨玟 (キム・ヒョンミン)
金烏工業高等学校 3年



僕の学校のほとんどの生徒が日本に関心が高く、僕もそんな友達の影響で自然と日本に興味を持つようになった。また、昨年、このキャンプに参加した生徒の積極的なおすすめで、彼がほぼ1年が過ぎた今でもキャンプで出会った友達と連絡を取り合っている姿を見て、日本について学びたいという気持ちと、友達も作りたいという思いで、このキャンプに参加することにした。

初日、ワクワクしながら会場のホテルに到着し、うちのチームのメンターさんとチームメイトたちと合流した。先に、韓国のチームメイトたちと挨拶を交わしたが、僕は幸運にも同じ学校の友達と同じチームになっていた。正直、僕は人見知りな性格だったが、同じチームに知り合いがいたことと、メンターさんがとても優しくかったおかげで、他のチームメイトたちともすぐに打ち解けることができた。

韓国のチームメイトと挨拶を交わしてからまもなく、日本の学生たちが会場に入ってきた。うちのチームでは、韓国人は日本語で、日本人は韓国語ではじめての挨拶を交わしたが、自分が言っている時は気付いていなかったが、外国人から韓国語で挨拶

をしてもらおうと、なんだか不思議な感じがした。

翌日は、オリンピック開催予定地を見学した。冬季オリンピックの種目について新たに教えてもらったり、実際に競技が行われる予定の競技場を目の当たりにすると、期待に胸が高ぶると同時に、この韓国でオリンピックを開催するんだ、という実感が湧いてきた。

経済現場体験の際は、ハーブナラ農園を訪れ、ハーブ農園についての講話を聞いたり、オリンピックのロゴ作りをしたりしたが、落ちている葉っぱや花びらを拾い集め、オリンピックロゴを作るのがとても楽しかった。

それから、会場へ戻り、ゴールデンベルというクイズ大会に参加した。第2問で、ほとんどの参加者が脱落し、それからも正解率が低くて、敗者復活戦を何回も繰り返し行っていたことが記憶に残っている。ゴールデンベルでは、チーム以外の日本の参加者とペアを組むことになり、より多くの友達を作れる良いきっかけになった。

3日目は、一日中会場で事業発表会の準備をした。うちのチームは、みんな想像力が豊かで、次々とアイデアを出し、企画の範囲が広がるばかりで、なかなか前に進めなくなって、この日は、徹夜をしてしまった。小物を作り、sn1(韓国の芸能番組)のgtaのように仕上げたいと思っていたが、時間が足りなくて、短い動画と寸劇だけになってしまい、心残りはあったが、この日をきっかけにみんなと本当に仲良くなれたようで、疲れもぶっ飛ばすくらい楽しい一日だった。メンターさんの、ブルゾンちえみのコスプレは圧巻だった。

4日目、いよいよ発表会の日。正直、上手いかなかったらどうしよう、と心配していたが、とても楽しく上手にやってくれたチームメートのみんなに本当に感謝している。発表の時に、僕ももっと積極的にやればよかったな、と少し悔いが残っている。

うちのチームは審査員特別賞を受賞し、賞品として携帯扇風機をもらった。賞品の中で一番実用的なものをもたらえたようで嬉しかった。

無事に発表会を終え、ミニ・オリンピック大会に参加した。優勝はできなかったが、チームメートたちと一緒に協力しながら競技をこなしていくうちに、みんなとより仲良くなる事が出来たし、協調性を養う良ききっかけとなった。

夕食には、野外でバーベキューを楽しんだ。最初は、お肉を焼いてくれる方がいて、気楽に食べられたが、後は、友達と二人で直接お肉を焼いて食べた。煙で目が痛くな

ったりもしたが、本当に楽しかった。次の日程があったため、食べきれずお肉を残してしまい勿体なかったが、この日から二日続けて髪の毛から肉の臭いがする珍しい経験をした。事実上、これがキャンプの最後の夜だったので、この日は夜を明かしてみんなと遊んだ。

最終日、ソウルで昼食を食べて、アウトレットを散策してから、みんなと別れた。別れる直前にみんなとたくさんの写真を撮ったが、前からもっとたくさん撮っておけば良かった、と後悔した。バスを見送る瞬間はまさに涙の海になってしまった(メンターさんも含めて)。僕は泣きそうになったが、泣かなかった。期間が短くてとても寂しかった。今度また会える日を約束しながら、ソウル駅に足を運んだ。そこで、韓国の友達やメンターさんとも別れて家路についた。

約2週間が過ぎ、感想文を書いている今も余韻が残っている。最初は軽い気持ちで応募してみたものが、こんなに心に刻まれる思い出になるとは、夢にも思わなかった。いつも夏休みを無駄に過ごしてしまっていた僕にとって、かけがえのない大切な経験になったし、このキャンプをきっかけに日本語はもちろん日本についてもっと勉強しなきゃと思うようになった。それだけじゃなくて、外国の友達から韓国について質問された時に、しっかり答えができるように、韓国についても、もっともっと勉強しようと思った。

今も LINE を通して、チームメートみんなと活発にメッセージのやりとりをしている。学校が始まったら、やりとりが少し減るかもしれないが、これからも途切れないように交流を行っていきたいと思う。また、機会があれば、みんなとぜひ再会したい。

キャンプの参加者のみんな、メンターさんたち、スタッフの皆様に関心から感謝申し上げます。最後に、一生忘れられない素敵な思い出を、本当にありがとうございます。チーム2！連絡を忘れずに、また会おうね！

「第24回日韓高校生交流キャンプ感想文」



井田 新
麻布高等学校 2年

職員室でキャンプ参加者募集のポスターを見かけた時、僕は非常に悩んだ。

韓国の高校生と交流できる点が非常に魅力的だった。一方で「オリンピックに係る事業案を考える」と記されており、その難しそうな課題に僕は躊躇していたのだ。

結局「経営・経済の基礎知識の無い学生でも十分にこなせる」というポスターの宣伝文句を信じ、申し込む事にした。

実際、知識が無くても問題はなかったが、OBの方など周りに頼りっぱなしであったため、少しは勉強していけばよかったと反省している。

キャンプ期間中、文化の違いに基づいた考え方の違いを実感する機会が多々あった。僕らは ALPH700 というカードを用いる事業

を考案した。簡潔に説明すると、コンビニなどで商品の価格を通常時の2割増し程度にし、大会の収入源とする。一方で、地元住民やボランティアにはカードを配布し、前者は通常時と同じ価格、後者は通常時の1割引程度で買えるというものだ。

この事業を練る上でも文化の違いを意識させられる機会は多かった。例えば、韓国人は小額であってもクレジットカードの使用を好み、高校生も日常的にカードを使用する。日々の買い物で現金を好む日本人からしたら理解し難い事である。こういった、生活スタイル・文化の違いが、それぞれの目指す事業の理想像に差異を生み出していた。

無償で働くボランティア、お金を生み出すビジネス。一見相対した物にも見える二

つを繋げるのは難しかった。考え方も十人十色、皆が納得できる事業案にするために只管議論を重ね、現実性を突き詰めた。一方で、議論に時間を掛けすぎ、プレゼンの準備が疎かになったのも事実である。折角突き詰めた事業、満身に伝えられなかった点には唯一後悔が残る。

5日間という期間は、チームが仲良くなるのに十分であったが、楽しむには短すぎた。

初日は皆緊張していた。それでも、2日目にチームで行動し、ミッションを行っていくと自然と打ち解けた。3日目は一日中意見をぶつけ合い、徹夜で発表準備。辛くて逃げたくなかったが、団結し絆が生まれた。4日目には事業を発表、結果は優秀賞。表

彰の後ミニ・オリンピックを楽しみ、チームで一晩過ごせば、お別れの最終日である。正直、キャンプ参加前は、チーム全員と仲良くなれないのでは無いかと不安であった。なんとも無駄な心配ではあったが、仲良くなったが故に別れは辛かった。

日本と韓国の間には、領土や歴史認識などについて多くの問題がある。しかし、そういった物は僕らの絆には影響しないし、こういった小さな絆が韓日の真の融和につながると信じている。たった5日、されど5日。チーム1の皆含め日韓の学生のお陰で僕は最高の時間を過ごすことが出来た。スタッフの方々などキャンプを支えて下さった皆さんには本当に感謝している。

